
はがない短編集

牙無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はがない短編集

【EZコード】

N9875Y

【作者名】

牙無し

【あらすじ】

はがないの短編集

あくまで原作の補完や番外編になるとと思われます

pixiv・TINAMI・自サイトにも重複投稿アリ

* 名前を登録してください * (前書き)

ネタ考察時の読了巻数 1巻

1巻「ギャルゲヱの世界によつゝそ」後

あだ名について、小鷹 side

あと地味にあだ名で呼ばれて嬉しくて、自分も人をあだ名で呼びた
かつた星奈。そんなお話

* 名前を登録してください *

羽瀬川小鷹の所属する『隣人部』には常時行うような活動がない。そもそも出来て1ヶ月にも満たない出来立ての部であることがあるが、基本的に良くも悪くも活動に対して積極的なのは三日月夜空ぐらいなのだ。

『友達を作る、あるいはできた後に円滑な付き合いができるように』という目的地も着地点も行方不明なままのこの部。当然のように部員に社交的な人間がいるわけもなく、夜空がいない日になれば他部員2名は各自勝手なことをして時間を潰す。

それでも早々に帰らないのは、なんだかんだで学校内に自分の居場所のようなものができた一種の優越感の所為なのかもしれない。

隣人部部室『談話室4』の中心に鎮座するソファの上で、小鷹はPSPをしていた。

妹から借りたものだが、本体のカラーは男が持つていてもさして違和感のないブラックで非常に助かっている。妹が好きな色、というより妹が生み出した痛々しいキャラクターの好む色であることを除けばだが。

プレイしているのは唯一所持するソフト、『モンスター狩人ボーダブル』

多人数協力プレイ推奨で難易度が設定されているゲームだが、それでも何度も倒されていくうちに立ち回りは覚えていった。経験値は確実にプレイしている本人にもたまつていく。

そうして『ひとりでアクションゲームをする際の効果的な動き方』という経験値を着実に稼いだ一端のハンターが出来上がるわけだが。これが良いのか悪いのかについては思考を放棄している。多分そつちのほうが傷つかずに済むだろうから。

今ではプレイキャラクターより何十倍もの巨躯を誇るモンスターどもを狩つて装備充実してきていた。

今度の相手は四速歩行の雷獸。

ここは多少防御を捨ててでも属性耐性を付けたほうが無難だろうか。

「さつきから何百面相してるので。キモい」

……酷いいいようだ。

先ほどまで据え置きのゲーム機でギャルゲーをしていたはずの星奈がこちらに顔を向けていた。

隣人部の参加条件を満たす友達ゼロ人の女子。確かにちょうど使えそうな素材を確保してにやけていたかもしれないが、あんまりではないだろうか。

自分は百面相どころか「やつぱりケーキはイチゴショートよね」だの「うん、ボブカットも似合つてるよ」だの、拳句の果てには「だつて私たち友達じゃない！」と叫んだくせに。

部室内には鼻にかかる声で歌声が響き、テレビ画面ではアルバムを模したグラフィックが写っている。左ページに蒼い髪の美少女のCG、右のページにスタッフホール。どうやらHondeイングを迎えているらしい。

「つていうかまだ『モン狩』なんてしてんの?」

「俺の勝手だろ?」

いつぞやの部内モン狩協力プレイを思い出したのか、星奈の表情は不愉快気に歪んだ。

不躾に画面を覗き込んでくるものだから画面が翳つてしまつて、ついのことこの上ない。

ちらりと目線だけ上げると、思いのほか近い彼女との距離に少し

喉が詰まつた。

綺麗な顔立ちにむかかわらず、出でくる感想が『もつたいない』といつ段階で、田の前の美少女の内面の残念さを嘆かずにはいられない。

黙つていれば可愛い、といつ点が星奈と彼女の仇敵の唯一の共通点だ。

「やつぱりダつさいわね」

見定めるような蒼い瞳が、鍛冶ハンマーを振るう分身を見ていた。ランクは昨日3になつたばかりで2日で最高ランクまで上り詰めた星奈とは比べるべくもない。

引き気味のカメラワークでもわかる金の長髪が槌の動きに合わせて乱れている。

このキャラメイクについても部内でも散々にこき下ろされている。だから星奈に見せたくなかつたという気持ちもあつた。

「ほつとけ。俺は結構気に入つてるんだよ」

「そうじやなくて、名前よ名前」

「は？ 名前？」

そういうえば名前についてもなんだかいつてたな。

正直ゲームに実名を書いて感情移入することを好むタイプではない自分からすると、あれぐらいが妥当なあたりだと思つたが。自分大好きな星奈に通用するはずもない理屈だ。

「『ホーク』なんてやつぱりチープでクサイ感じ」

「英訳がチープになるなら夜空だつて『NIGHT』だつただろ」

「あの女狐はどうでも良いわよ」

夜空の名前を出した途端、撫然として顔を背ける。
まあ怨敵の名前など確かにどうでもいいだろ？し、もつといえば
どんな名前だらうが憎悪の対象なのだろう。

「だつたらどんなのがいいんだよ」

「別に難しく考えなくたつていいでしょ。丸まんま名前じやなくて
も、親しくあだ名で呼べるような」

星奈がうんうん唸り声を上げて『いる隙に、防具が完成した。
多少動きが遅くなつてしまつが、大型のモンスター相手ならなん
とかなるだろ？』
装備したときの見栄えも悪くない。

「やつねえ、『タカ』とか！」

防具の性能を確認していた指が止まる。

「……いいじゃない、『タカ』！」

やつぱあたしつて天才ね。たちびに姓名判断師にでもなれち
やつ

耳に響く2文字が、どこか遠くで鳴つていた。

星奈の声ではなく、もつと幼い丸い声で。

「ねえ小鷹、あんたの登録ネーム『タカ』に変えなさいよ。確か村
で出来たはずでしょ？」

興奮している星奈の声は、小鷹の体をすり抜けてった。

意識は過去の断片に飛んでいた。

埃っぽい砂の匂いと、夕暮れの差した小さな遊具が褪せた色彩の中で浮かんでいる。

逆光の中で、少年が笑いながら手を差し伸べている。ひどく、懐かしい光景だつた。

「小鷹？」

耳に痛いトーンから伺いたてるような声の落差で意識が戻つてきた。キヨトンとした星奈の大きな目にはつきの悪い男が映りこんでいる。

「いや、やっぱダメだ」

「えー、なんですよ！」

「なんでもだ。気に入つてんの。キャラも名前も」

紋切り口調で言い切り、反論する星奈を無視する。

正直、名前もキャラもそこまで愛着があるわけではない。

キャラクター・メイクは初期に決めてから変えられないが、星奈の

いうとおり、名前は簡単に変えられる。

それでも、変えたくなかつた。

例えば星奈が提案する名前がまた違つたら、この場を治めるために変えたかもしれない。

けどどうしても、『タカ』はダメだつた。

その呼び名は、特別なものだから。

「……わかつたわよ」

承諾の声を垂らす星奈だが、明らかに気分を害してこる。白けちゃつたとマウスの電源を落として、星奈はさつさと帰つてしまつた。

いつも少しばかり病むそんなことも、どうでもよくなつていた。画面の中で雷獣が猛る。標的を画面の中心に捉えて動き回るそれも惰性だった。

誰かが『タカ』と呼んでいる。

少し鼻にかかつた高い声は、今でも鮮明に思い出すことができた。そのあだ名で自分を呼ぶ奴はひとりしかいない。

幸か不幸か、それ以来あだ名で呼ばれることなんてなかつたし、自分からもそんなこと決していわなかつた。

十年前の記憶は昔と変わらず、いや昔以上に輝きを放つていて。だからいえなかつたのかもしれない。その呼び名が本当に『ありふれたものだ』と暴かれることが怖くて。

『あだ名は友達同士で使うものだからな』

黒くたなびく髪と憂いに翳る表情。

誰かの言葉を思い出す。ほんの最近、聞いた。その意味が、少しだけわかつたかもしれない。

画面の中の狩人『ホーク』はいつの間にか立ち止まり、雷獣の爪によつて昏倒した。それも気にも留めずに、小鷹はほんやりと小さな画面を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9875y/>

はがない短編集

2011年11月29日21時47分発行